

句龍考

森 安 太 郎

(一)

句龍とは左傳に出てゐる

共工氏有子、曰句龍、爲后土、……后土爲社。

昭公二十九年

を言ふものであるが、これによつて句龍なる名義は明白に大地の象徴とも考へられる后土、即ち社に密接に關係をもつてゐることが解かる。

國語に於ては

共工氏之伯九有也、其子曰后土、能平九土、故祀以爲社。

魯語

とあつて、句龍なる名は示されていないが、韋昭の解には「其子共工之裔子、句龍也」と説明が加へられてゐる。しかし前述の如く句龍が后土・社に關連をもつてゐると云つても、何故にこの句龍が后土とされ社となつてゐるのか理由は左國の記事のみでは了解出來ない。一體句龍なる名稱は、

左傳の記せるところでは人間にみてゐるものだと信ぜられるが、吾人は句龍の龍字に先づ注目するのである。山海經を見ると

共工之臣曰相柳氏、九首以食于九山、相柳之所抵爲澤谿、禹殺相柳、其血腥不可以樹五穀種、禹厥之三仞三沮、乃以爲衆帝之臺。

海外北經

共工臣名曰相繇、九首蛇身自環食于九土、其所馱所尼、卽爲源澤、禹堙洪水、殺相繇、其血腥臭不生穀、其地多水不可居也、禹湮之三仞三沮、乃以爲池、羣帝是因爲臺。

大荒北經

とある。語られてゐる所によれば、九土支配を象徴する九首蛇の性格は、その澤谿化し源澤化することにある。換言すれば相柳（相繇）は水土化する性能があるのである。郭璞は右の大荒北經の「禹堙洪水、殺相繇」に注して「禹塞洪水、由以溺殺之」と云つてゐるが、禹の堙塞した洪水なるものは、實は相柳（相繇）によつて起された洪水なりしことが相柳の性格より容易に推知し得られるのである。この點郭璞には本文の解釋が出来てゐない。又特に注意すべきことは、この九首蛇相柳の殺された場所が利用せられ、こゝに積土して衆帝の臺が建設されたことである。勿論大荒北經の方では、羣帝が來つて臺を建設したことになつてゐる。ともかくその臺の基底はその死蛇であると推定してよく、その死蛇は九土九山を食ふ（大地全體を食ふ）といった表現がとられてゐること

に於て、九首蛇の死骸は大地全體となつてゐると考へて不可なきものである。次に相柳の名義であるが、それが他方で相繇とされてゐるのは、郭璞の注せる如く語聲の轉であつて、その古音は *loeg* (柳) と *diog* (繇) であつて、この兩字の語頭音の互通は、柳の聲符卯が *diog* であり、愧と纒は同諧聲文字でありながら、その語頭音が *d* と *l* であることに想到すれば、相柳相繇の互通性は理解し得る。さてこの相柳は蒼龍であると吾人は推定するのである。楚辭天問に龍・遊押韻してある點より考へて、龍と柳(遊と同韻)との語尾音の互通は明白であり、その龍・柳の語頭は同紐であるから、柳は龍と斷定してよいのである。次に相と蒼との語尾音は同韻で問題はない。その語頭音であるが、相は心紐、蒼は清紐で相違はあるが、音韻學者は兩者の互通を容認してゐるのである。(高畑先生、周秦漢三代の古紐研究上)。例へば淬・粹・粹・碎は同諧聲文字であるのに前者の二字は清紐で後者の二字は心紐である關係は、蒼と相との關係に等しい。一體蒼・相・商・昌の字は互通したのでないかと想像する。陳夢家の説によると商契は蒼韻であるし(商代的神話與巫術)、又水經注によれば相・昌聲韻合(通訓定聲・經籍纂詁引)とある。しかるに昌の古音は徹紐で商の聲符章は知紐であるから、昌商は互通する筈である。蒼・相・商の語頭音が互通すべきは、鳥の諧聲文字寫鴉が清心審の三紐で蒼相商の紐と同關係にあることをもつてしても了解し得る。蒼・相・商・

昌の語尾音に至つては同韻であるから問題はない。かく蒼相商昌の四字の互通を認めるのは外でもない。前述の如く蒼韻は商契であるが殷世系中の相土・昌若も我々に理解し得る如く書き換ふれば、商土・商若であると信ずる。又かくあらねばならぬ根拠もあるが、こゝでは關係のないことであるから述べぬ。ともかく相柳は蒼龍であることは推定出來たそこでこの相柳即ち蒼龍と共工との關係を検討したい。

(11)

共工は已に引用せる魯語や周語に記載されてゐる如く、九有に覇を稱へてゐたとか、淫樂を虞んで其身を破滅したとか云へば、如何にも一人の帝王の様に考へられるが。試みに淮南子を見ると洪水を振起したものとされてゐる。他方高誘注や啓筮によると人面蛇身など解せられてゐる。この蛇身に注意すべきで、繁を厭はず淮南子其他に記載されてゐる共工に關するものを次にあげてみると

往古之時、四極廢、九州裂、……水浩洋而不息、……於是女媧鍊五色石、以補蒼天、殺黑龍、以濟冀州、積蘆灰、以止淫水、蒼天補、四極正。

覽冥訓

舜之時、共工振滔洪水、以薄空桑。

本經訓

昔者共工與顓頊、爭爲帝、怒而觸不周山、天柱折、地維絕、天傾西北、……地不滿東南。

天文訓

昔共工之力、觸不周山、使地東南傾、與高辛爭爲帝、遂潛于淵。

原道訓

禹有功抑下鴻、辟除民害、遂共工、北決九河、通十二渚、疏三江。

荀子成相

と書かれてゐる。右の記載をみると、共工は伏羲・顓頊・高辛・舜・禹の代に互り多年難をなしたものの如くであるが、この中で帝嚳高辛氏は俊(舜)であり(王國維説)、この帝嚳高辛氏は吾人の研究によれば帝嚳高章氏となすべきであつて(支那學特別號殷商祖神考)、^{アキラカ}章 ting と^{アキラカ}陽 tiang とが互通音を有せるとともに、その字義に於ても一致する所から、帝嚳高章氏は顓頊高陽氏であることも、已に吾人の注意せる所で(殷商祖神考)、且又俊の子に中容があつて(山海經大荒東經)、高陽氏の才子中にも仲容がある(左傳文公十八年)から、帝嚳・高陽・舜は一致すべきである。しからば淮南子覽冥訓の女媧の問題である。一體女媧を伏羲の配とのみ思惟するのは誤謬で、現に世本に於ては女媧を禹の妻としてゐる。これを單に誤記として終ふのは女媧は伏羲の妻であるとする先入見によるものであつて、前記の共工に關する洪水説話は皆同一のものと信ぜられる。覽冥訓のものは女媧の名義を出して、共工の名義は出てゐないとの抗議が出るならば、論衡の

儒書言、共工與顓頊、爭爲天子不勝、怒而觸不周之山、使天柱折、地維絕、女媧銷煉五色石、以補蒼天、斷鼇足、以立四極、天不足西北、故日月移焉、地不足東南、故百川注焉。

談天篇

とあるを參考すればよい。こゝに於ては共工・顓頊・女媧の名義が混在してゐるのであつて、要するに覽冥訓のものだけを伏羲時代の洪水であるとして分離する譯にまゐらぬ。この談天篇の顓頊即ち高陽氏が帝嚳俊に一致することは論じた。しからば禹と共工の對立は自ら問題はなくなる。それは古書記載に於ても禹と舜とは時代が接近してゐるからである。そこで前記の淮南子諸篇其他の共工に關する洪水傳説はもとは同一のものの傳聞異辭となる。さてこれ等が同一傳説であるとする、淮南子覽冥訓の「水浩洋而不息……殺黑龍以濟」と本經訓の「共工振滔洪水」とを對照して考へると、つまり共工が黒龍で、洪水はこれにより振滔され、その洪水の治つた所以は黒龍即ち共工が殺戮されたからである。かくて已に注意せる共工が蛇身であることに關連せしめて共工の本身を暴露すれば、その龍蛇であることは確實である。そこで山海經の海外北經・大荒北經に於ける禹に殺された共工の臣で九首蛇である相柳（相繇||蒼龍）を解釋すると、共工の本身龍體が分化して共工の臣とされたまでで、是亦上記淮南子其他共工の洪水傳説の一種であることが明白となる。且又蒼龍と共工と關係づけたのは決して不當でないのである。春秋繁露に

春早求雨、令縣邑以水日、禱社稷、……於邑東門之外、爲四通之壇、……其神共工、……以甲乙

日爲大蒼龍一……爲小龍七

求雨篇

とある。即ち求雨の場合祈る神は共工であり、且蒼龍の形象が造作されることに想到すれば、共工と蒼龍の關係は明白である。

(三)

さて已に山海經蒼龍(相柳・相繇)傳説に於てその九首蛇蒼龍の死體が大地となつてゐることに注意した。そこでこの事を今少し基礎づけねばならぬ。古代支那に於ては誰もが知る如く地神を祇と稱する。しかるに上來檢討を試みたるその本體を龍とせる共工は、國語章昭解によると、

共工氏伯者、名戲、弘農之間。

魯語章解

(一本作共工氏伯者、在戲農之間)

と記されてゐる。地神祇 *geies* と共工戲 *geies* とは勿論互通音である。或は右の章解の一本には戲字を共工名としてはゐないとして、反駁する人もあらう。しかれば共工は窮奇と稱せられることに想到すればよい(左傳杜預服虔注)。窮 *kyung* は共 *kyung* に相異なく、奇は古音 *kye* であつて明かに義 *kye* と互通音で、この義字は實際上の使用として戲と書せられることは、伏羲を伏戲、或は宓戲と書せられてゐることによつて知られる。しかれば共工即ち窮奇が地神祇と同名であつたことは確實である。窮奇とは共戲即ち共工戲である。故に章解の一本は「共工名戲」なる解釋に了解

が出来ず改竄したものと信ぜられる。そこで共工が龍であり、それは山海經の九首蛇相柳であり、且地神祇と關係あることになつた。先に吾人が山海經の九首蛇の死體が大地であるとした解釋は誤つてゐなかつたのである。更に共工の一名康回 *Conar* も恐らく康虺 *Xiwai* 即ち大虺と推定され、楚辭天問の「雄虺九首」と關連してゐると考へて不可ない。そこで始めに還つて共工の子即ち后土神句龍の名義を案するに、淮南子高誘注に句を九と讀んでゐる場合あることよりみて、句龍は九龍となし得る譯である。九龍と九首龍は概念的にさう違つたものでない。

共工〔之子〕

句龍（九龍）

后土

社神

共工〔之臣〕

相柳（九首龍）

戲（祇）

地神

康回

大虺九首

鄧漢之所祭后土處

研究せる結果は右の表が成立することになる。已に言及せる如く龍蛇は共工の本體であるから、共工の臣とはその分化したる異傳であり、句龍（九龍）が共工の子とは、共工龍體（それが大地であることは已に注意した）が一變化して后土神となつてゐるのであるから、共工の次代として共工の子として語られたものであらう。康回が大虺らしいことは言つておいたが、説文に「鄧」なる場所は后土を祭つた場所であるとしてゐるが、これも回（虺）*sew's rems rems* 鄧 *sew's rems rems* 互通する所から考へて、

后土神の祭祀される地名が鄧(虺)とは、やはり句龍即ち后土、相柳即ち大地となつた同關係にあるものと信ぜられ、たとへそれが漢に於て后土を祭つた所であつて時代は降つても、そのよつて來る所は古いものに相違ない。

(四)

以上によつて支那古代に於ては龍が大地或は地神となつてゐることを觀察した。かくて曾て殷商祖神考に於て論じたる天上に對せられた、大地のシンボルとしての儀臺(容臺)の意義も解明せられるかの如くである。屢々言及せる如く山海經によれば九首龍が殺された場所に臺が築かれたのである。この事が已に龍と臺との密接な關係を示せるもので、共工龍は國語韋解ではその名を戯とせられてゐるのは前述の如く、且伏戲を伏羲と書する事實と羲は儀と同類の諧聲文字であることによつて知られる如く、儀臺なる名稱も龍即ち共工戲に關係がある。實は伏羲そのものは共工に一致するものでないかと吾人は疑問を有してゐるが、何れ解決の機を得るものと信ずる。崔譔は義臺を靈臺である(莊子馬蹄篇)と云つてゐるが、我々は靈臺なるものが古代支那に存在したことを知つてゐる。この靈臺の靈も同音の龍義を有する靈字のあることに注目すべきである。要するに義臺・靈臺は龍臺と想像され、こゝにも龍と臺との關係を窺知するのである。しからば句龍即ち龍神を

祀る社と臺との原始は一致するらしい。社に於てする祭儀的行事は多方面に互るが故に、その何れの行事が社神の本意に適合したものが取捨に困却するのであるが、右の如く社神が龍神であるとする、

湯伐桀之後、大旱七年、史卜曰、當以人爲禱、湯乃翦髮斷爪、自以爲牲、而禱於桑林之社、而雨大至方數十里。尙書大傳

早既太甚、黽勉畏去、胡寧瘕我以旱、僭不知其故、祈年孔夙、方社不莫。

詩大雅雲漢

大旱雩祭而請雨、大水鳴鼓而攻社。

春秋繁露精華篇

秋大水、鼓用牲于社于門。

春秋莊公二十五年

雨太多、……祭社擊鼓、三日而祝先再拜乃跪、陳陳已復再拜乃起、祝曰、嗟……今淫雨太多、五穀不和、敬進肥牲清酒、以請社靈、幸爲止雨、除民所苦。春秋繁露止雨篇

などの大旱に雨を社に祈り、又大雨を止むることも社に禱る精神も理解し得るのである。それは龍は水を支配するものであるからである。龍は雲雨を興す職能があると信ぜられてゐるが、右に引用せる大傳の桑林の社なる桑林は、呂氏春秋高誘注は「桑山之林、能興雲作雨」と解せるその職能と一致せることも注意すべきであらう。龍に就いては春秋元命苞によると

龍之言萌也、陰中之陽也、故言龍舉而雲興。

古微書七

と説明されてゐるが、龍は萌なりとは何の義か、白虎通は「芒之爲言萌也」と云つてゐるが、この芒字の連語に混芒なる語がある。勿論混冥と同義語で、その義混沌未分、幽微暗黒を意味するもので、故に「芒昧也」「冥幽也、暗也」「昧冥也」等の解釋もある。しかるに左傳によると、

少皞氏有不才子、……天下民謂之窮奇。

文公十八年

とある。杜預・服虔は窮奇を共工であると解してゐるが、同じく少皞金天氏の子に關するものに同左傳に

昔金天氏有裔子曰昧、爲玄冥師。

昭公元年

とある。會箋の裔子は末子なりの説に順へば、共工窮奇（それは前に検討し盡したる龍）が玄冥であると推定して不可はない。即ち春秋元命苞の龍が萌で、それは芒で冥であることと、玄冥が窮奇で共工龍であることと一致するではないか。吾人は殷周祖神考に於て支那古代に於て龍は暗混沌を象徴してゐることを論じたが、こゝに更に一證を加へ得た譯である。固り混冥と玄冥とは同意語であつて、龍が水の支配者であるとともに、玄冥なる名稱が水官として水の司掌者であることも合致する。そこで上來證明し得たる所を表にすると、

となる。かくして社に日蝕を禳禱する原始的意義も明瞭となつた。春秋經或は傳に

六月辛未朔、日有食之、鼓用牲于社。 莊公二十五年

九月庚午朔、日有食之、鼓用牲于社。 莊公三十年

六月辛丑朔、日有食之、鼓用牲于社。 文公十五年

夏五月甲戌朔、日有食之。……昭子曰、日有食之、天子不舉、伐鼓於社。 左傳昭公十七年

日食則曷爲鼓用牲于社、求乎陰之道也、以朱絲營社、或曰脅之、或曰爲闇恐人犯之、故營之。

公羊傳莊公二十五年

とある。日蝕の時に當つて社に伐鼓して責求するのは、その神が暗黒神龍であるからであつて、時

ならぬ日蝕による晦冥は、暗黒神龍の仕業なりと伐鼓責求するのである。故に何休や杜預の

或曰脅之、與責求同義、社者土地之主、月者土地之精、土繫於天而犯日、故鳴鼓而攻之、脅其本

也、朱絲營之、助陽抑陰也。 公羊傳解詁

責群陰也。 左傳集解

正義云、郊特性云社祭土而主陰氣、……論語云鳴鼓而攻之、伐鼓者是攻責之事、故云責群陰也、

日食者、陰侵陽、故責陰以救日。

とある。社を陰神と解してゐるのは、ある意味に於て當つてゐるのであつて、唯何休や杜預は、社の陰神性は、その暗黒神龍から來てゐることの原始的意義を知らなかつただけである。朱絲で社を縈するのは、公羊の一説である「爲鬮恐人犯之」の意味でなく、「脅之」の意味であつて、我國にも雨乞の際地藏さんを縛りあげておいて、雨が降れば解く仕方がある。その朱色の繩で縈絡する點が興味あるところで、固り暗黒神は朱明色はお嫌ひの筈である。これで淮南子覽冥訓の洪水傳説に黒龍とある理由も明白となつた。吾人が殷商祖神考に於て到達したる支那最古の開闢傳説は、暗黒神（玄冥 || 龍）と光明神（昭明 || 俊）との對立であつた。それが又ある場合には光は冥から生れるから、玄冥を昭明の生みの親とする形式をとる。その場合玄冥龍は母となる。古代支那に於てはもともと蛇龍の類は陰物女性を象徴するらしい。故に詩經小雅斯干に「維虺維蛇、女子之祥」とある。女性とあらばその對立關係に於て陰神龍は陽神俊の妻ともなり得る。かゝる始祖の母、或は始祖の妻としての意味の龍は大母神として高禋神的地位に立つ。そこに社神の淫蕩的性格も存する。墨子に

燕之有祖、當齊之社稷、宋之桑林、楚之雲夢也、此男女所屬而觀也。

明鬼下

とある男女集合して観る所とはこれを指すのである。周禮媒氏の「男女之陰訟、聽之於勝國之社」も同じ意味である。社と原始的には同一である臺にも高禊的性質があるが、これ等社臺の高禊的性質は陳夢家が高禊郊社祖廟通考なる論文に詳述してゐるからこゝに述べぬ。儀臺の儀及び同一物たる容臺の容、又共工名の戲等を語原的に女性なることを證明する方法もあるが省略する。

以上によつて社神の龍神性を摘發し得たるとともに、后土即ち大地との關係を明白にすることが出來たことと信する。(昭和十八年六月稿)